

もっといい明日が見えてくる -Letters from GNOBLE

Gno G-let

グノレット

vol.3

2011年1月発行

中学生・高校生の保護者の方へ

新年特別増刊号

Ability is nothing without opportunity.



知の力を活かせる人に **GNOBLE**

GNOBLE（グノーブル）は、辞書に載っている言葉ではなく、私たちの指導理念を現した造語です。

GNOは「知」を意味し、BLEは「力」を表します。

10代の頃は、有機的につながった一定の知識を身につけ、論理的に考え、外国语が使える力を培う大事な時期です。

それと同時に「人とのつながりを重んじること」も大切なことだと私たちは考えています。

《ペアレンツ・ボイス》

グノーブル選び、子どもを東大合格に導いた
保護者が語る

『本当にいい進学塾の選び方』

おしゃて！先輩

東大を目指すなら、
主体性を持って勉強に向かうことが大事
緒方 優くん（東大理Ⅲ 1年 開成出身）

勉強最前線

～いま、教室で～

VOL.1 中1 数学 aクラス編

数学科 纓田 邦浩

VOL.2 中3 英語 aクラス編

英語科 関田 裕一

VOL.3 高校古文編

国語科 行村 真治

カラダとココロのSOS

寒い季節の大敵！風邪対策にも活用したいアロマのあれこれ
アロマセラピスト田中薫さん監修

グノーブルを選び、子どもを東大合格に導いた



二瓶智香子さん(文I・桜蔭出身)のお母様

保護者が語る 『本当にいい進学塾の選び方』



島田くん(理I・筑駒出身)のお母様

東大を目指すなら、塾選びは親の役割。

二瓶：うちは中学受験の志望校を決めてから塾選びをしました。ですから、塾選びも私の一存で一番大変そうなところを選びました。中学受験はしっかりしたカリキュラムに乗って行けば大丈夫という確信が私の中にはありましたので、本人がついていけば合格できるだろうなと。ですので、親が「行かせたい」と思っている学校にたくさん入っていることが塾選びの基準でした。

島田：うちの場合は高校から筑駒ですが、「中学は普通の公立中学へ行って、高校は都立の上位校に入れればいいや」くらいの気持ちでした。ただ、今は上位校に行くには内申が良くなくてはならないとか独自の試験などがありますので、それをクリアするためには「中学の授業だけではダメだ」ということを周りのお母さん方からさんざん聞いており、そこで私が塾選びをしたんです。その頃、地元の駅周辺に新しい塾がたくさんできて足繁くまわったのですがいまひとつで。仕方なく隣の駅まで足を伸ばしたところ、ようやく私が納得できる塾にめぐり合うことができた次第です。

二瓶：中学受験、高校受験はもとより、昨今は塾なくしてレベルの高い大学に入ることはなかなか難しい時代ですよね。となると、中学・高校に入ってからも大学進学のための「塾選び」というのは大事なこと。そこまではやはり親の役割ではないかと思います。より確実な道を選ぶのは、中学生・高校生といえども子ども自身ではなかなかできないものです。東大を目指すとなればなおさら親の判断は重要です。

島田：そうですね。高校生でも親の係わりはまだまだ大切だと思います。ウチの子も高校入学後に数学は東大専門塾に入ったのですが、肌に合わずに2か月で辞めています。その後に一旦は自分で塾探しをしていましたが、何やら大規模の予備校を見てたりしたんですね。そこで私は口を出しました。一度遅れをとってしまった息子が、大規模教室の授業で軌道修正できる

2010年春、東大に現役合格を果たした島田工くん（理I・筑駒出身）と二瓶智香子さん（文I・桜蔭出身）。現在は大学にもすっかり馴染み、2人とも毎日を大いにエンジョイしているそうです。今回は、そんな2人のお母様にグノーブルにお越しいただき、塾選びのポイントと、その成功体験をお聞きしました。（取材・文 吉村高廣）

とはとても思えなかったんです。やはり少人数で一人ひとりをしっかりと見ててくれる塾でないと難しいだろうなと。そんなこともあって数学もグノーブルへ通うよう私が仕向けました。私自身、グノーブルの英語には全幅の信頼を置いていましたし、数学も一人ひとり見ていただけると思いましたので。

視点を変えれば、塾の選び方は変わる。

二瓶：高校生になると保護者間での口コミは大きな影響力がありますね。話すことといったらほとんどは塾の話題じゃないでしょうか。またそうした中でも必ずグノーブルの中山先生の噂は出ますし、興味をもたれる方は少なくありません。いろいろ気に留めているとアンテナにひっかかるてくる塾は限られてきます。英語ならグノーブルの中山先生がいいとか、世界史ならどこの誰、物理だったらどことこと。

島田：やはり東大を志望する方にその傾向が強いのではないでしょうか。学科ごとに「どこどこ塾の、なにに先生」と、個人指名的な傾向があったのは筑駒も同じでした。

二瓶：小学生や中学生くらいまでは、教科まとめて「どこぞの塾に」ということでもいいかも知れません。でもやはり大学受験となるとそれぞれの教科の専門性が高くなってきますので、あらゆる教科を一つの塾にひとくくりで任せようと思う親御さんは少ないと思います。ウチの子は結果的に、英語と数学、そして国語でお世話になったわけですが、そこに落ち着くまでには、いろんな塾の説明会に出席しました。でも、説明会で自分の塾を悪く言うところはないわけで、見極めるポイントはなかなか難しいと思います。私が注目したのは先生の熱意や人柄です。もちろん授業の進め方は大事なポイントですが、『子どもとの相性』という部分を考えた時「果たしてこの先生に自分の娘を預けられるだろうか」という、勉強とはま



た違った角度からの視点を大切にしました。いわば母親の「勘」です。たぶんそうした視点で見ると塾の選び方もずいぶん変わってくると思います。繰り返しになりますが、親の役割というのはいろんなところから舞い込む情報をしっかり分析した上で、それが「果たして自分の子どもに合っているだろうか」と勘を働き、確かな道筋を示してあげることだと私は思います。

グノーブルの英語は、東大対策だけじゃない。

二瓶：グノーブルは知名度が高くなっていると思います。あっという間に実績も出していますし凄いなと思います。私は娘の東大受験を通して、迷わずここに入れば「間違いない」と思うのですが、中高一貫で桜蔭に入れた保護者の方の中には、やはり東大専門塾のブランドを捨てきれないという方がまだまだ少なくありません。そのあたりが少々歯がゆいところもありますね。

島田：私の場合はむしろ逆で、下の子が通う駒場東邦のお母さん方にグノーブルの良さを伝えるのですが、決まって返ってくる言葉が「グノーブルって東大を目指す人ばかりなんでしょう」と、そうおっしゃって戻されてしまうんです。確かに実質的な人数比率でいくと東大に進学する生徒さんは他の塾より勝っているのですが、決して東大専門というわけではありませんよね。ただ、あまり門戸を広げ過ぎても中途半端な印象を与えててしまうし、そのあたりが難しいところなんでしょうね。少なくとも桜蔭や駒場や開成といった学校に子どもを預ける保護者の方は、「東大」という名前が頭に刻印されていることは間違ひありませんから。

二瓶：以前娘から聞いたことがあるのですが、グノーブルで学ぶ英語は東大受験という狭いカテゴリーだけに対応したものではなく、それこそ早慶などの難関私立大学にも十分に対応できる内容のものだったと聞いています。でも東大受験専門の塾では東大受験だけの勉強しかしませんから、東大受験以外の広がりがありません。ですから、「グノーブルではあらゆる大学受験をカバーしているし、将来にもつながる」ということをきちんと伝えた方がいいのではないかと思う。グノーブルの場合、とくに英語は東大を意識している保護者の間でいい噂が先行しているだけに、かえって「難し過ぎるのでは」という誤解も生んでしまったかもしれませんね。

自分の子どもだけ見て欲しい。 それが親の気持ち。

二瓶：グノーブルは、まだ歴史の浅い塾ですよね。でも私は、そのことについては何の不安もありませんでした。なぜなら塾に託すというより先生に託しているという気持ちがあったからです。もちろん私は授業を受けたことがないので、説明会の印象や保護者間での口コミの噂などから知ることしかできませんが、娘の様子や話しぶりなどを聞いていて「これは間違いないな」と確信していました。とくに中山先生の授業は、多くの知識を次々に与えてくれてとても楽しかったようです。そうした話を楽しそうにする娘の姿を見ながら「いい塾なんだろな」とつくづく感じましたね。『東大を目指す』という親子にとっての命題がありながらも、どこかで「勉強って、本当はこういうものなんだろうな」という思いを感じていたのも事実です。中学生であれ高校生であれ、やはりまだまだ子どもです。勉強のことで私も本人に任せたことも何度かありましたが、結局「ほら、お母さんの言ってることが正しかったじゃない」ということがずいぶんありました。だからこそ、まわりの流れに乗って塾を決めるのではなく、説明会などに足を運んで比較をしながら塾選びをしてあげることが、親の努めではないでしょうか。

島田：私の塾選びの視点は、少人数制で自分の子どもにしっかりと目をかけてくださる塾であることが大前提でした。どれだけ歴史があって名前の知られた塾であっても、生徒の人数が多くなると先生の目は届きません。親としてみれば自分の子どもだけ見てくださればいいというのが本音もあります。それに限りなく近い環境だったグノーブルとの出会いは、本当に良かったと思っています。また、先生が子どもの名前を全員覚えていてくださるというプロ意識にも感心しました。それだけ先生との距離が近いということは、他の生徒さんとの距離も近いということです。中には飛びぬけて優秀な生徒さんもいるでしょうし、そんな中で学んでいければいい意味でのライバル心のようなものも芽生えてくるはずです。肝心なことは、子どもというのはそうした環境でないと自主性が育まれにくいということです。東大の壁をクリアするためには子どもの心が成長しなくては難しいと思います。ただ塾に行って勉強をやればいいというのではなく、信頼できる先生にサポートされて、同じ目標を持つ子どもたち同士が競いあう気持ちを持ちながら、心の強さを育んでいくことが何より大切。グノーブルには、それがありました。



勉強最前线

～いま、教室で～VOL.1 中1数学αクラス編

授業開始前からコツコツと勉強に励む生徒もいれば、学校の枠を越えて友だち同士でおしゃべりしている生徒もいる。授業が始まると積極的に手を上げて「先生、わかんない！」と質問する生徒もいれば、分かっているのに発言できなさそうな生徒もいる。特別なことはない、当たり前の中学1年生の教室での光景だ。ただ一つ違うのは、ここにいる生徒たちは、抜群に優れた“数学脳”を持った中学1年生であるということ。とはいってもが皆、小学生の頃から算数が大好きで得意だったというわけではなく、中学入学以来わずか8ヶ月、縦田先生に学び劇的に学力が向上したという生徒も少なくない。その秘密は、良いテキストや授業の進め方もさることながら、子どもの心の掌握術にあることを今回の取材を通して実感した。

(取材・文 吉村高廣)

先生と生徒という垣根をひとまず外す。

普段の生活の中でも、「こうしなさい」と頭ごなしに言われれば、何かしら反発したくなる。一方で、「好きにしなさい」といった態度を取られれば、それはそれでまた面白くない。子どもを持つ親としての経験上、中学1年生というのはなかなか難しい年頃だ。

グノーブル数学科の縦田先生は、そんな子どもたちとのコミュニケーションの取り方が抜群に上手い。子どもたちにとって取っ付きやすい風貌も得をしているのは事実だが、授業に参加させていただいてつくづく実感したのは目線の置き方だった。

この日の授業は午後6時からのスタートだったが、先生は5時を過ぎたあたりから教室でスタンバイしていた。ポツリポツリとやってくる生徒たち一人ひとりに大きな声で「はい、こんにちは！」と声をかけ、添削した宿題プリントを返していく。その間、プリントの返却を終え手持ち無沙汰となった男子生徒たちは、縦田先生を質問攻めにする。「ねえ、どんなゲームが好き？」「なんでメアド教えてくれないの？」「どうしてそんなに黒い顔してるの？」挙句の果てには「人生ってどんな意味があるの？」など、子どもたちの質問攻勢は止まらない。かたや先生の方も「まったくしょうがないなあ」と言いながらも、生徒たちとの対話をどこか楽しんでいる節がある。そこには先生と生徒という垣根は感じられない。むしろ授業前の時間は、生徒にとって縦田先生は『何でも知ってる面白いアニキ』に他ならないのだ。

よく分かる。だから、数学が好きになる。

授業は宿題となっていた『有名問題』の解説から始まった。『有名問題』とは、この先必ずどこかで向き合うこととなる数学的な考え方

中1数学α（最上位クラス）授業ルポ。

学力は劇的に向上する。

先生の接し方次第で、
揺れ動く中学1年生。

自覚と甘えの狭間で

数学科 縦田 邦浩
おだ くにひろ

を、縷田先生ならではの視点で噛み砕き出題したもの。この日の問題テーマは『論証』だった。基本的には各自宿題の解答を持っており、その答え合わせを行うわけだが、先生の解説は単なる答え合わせに終わらない。答えを導き出す過程をゲーム形式で論証していくという実にユニークな解説方法で進めていくのだ。当然ながら面白いし分かりやすい。もちろん生徒たちは夢中になる。先生の解説を聞きながら取材であることを忘れ、思わず「なるほど」と声を出してしまったほど。生徒たちも、これなら数学が好きになるはずだ。

『有名問題』の解説を15分ほどで終えると、いよいよ本授業。『メネラウスの定理』と『チェバの定理』を使った図形の標準問題の演習である。10分と時間を区切り演習をスタートさせるわけだが、驚いたことに4分を過ぎたあたりで問題を解き終えた生徒たちから手が上がり始めた。その都度先生は一人ひとりの生徒のもとに歩み寄りその場で添削を行うわけだが、7分を過ぎた頃には、あちらこちらで「先生、できた！」と声があがり、縷田先生は大わらわで汗をかきながら教室中を移動する。少人数制の授業でなくては実現出来ないし、限りなくマンツーマンに近い授業スタイルだった。

約半数が、東大入試問題をクリア。

この日の目玉の演習は、なんと東京大学の入試に出題された過去問だった。とはいえた生徒たちは、いささかも諦めることなく取り組み始めた。プリントを真剣に見つめる生徒たちに縷田先生が投げかけた言葉は「東大の問題であろうが何であろうが、解法の道筋さえ理解していれば同じだよ」というもの。そうは言うものの、数学を始めてまだ8ヶ月しか経っていない中学1年生には荷が重すぎはしないか…という懸念をよそに、なんと「出来ました」と手を上げた生徒が出現。先生はその生徒のプリントを手に取るとしばらくの間じっと見つめ「なるほど、こんな解き方があるのか…」と言ってプリントを戻したのには本当に驚かされた。

添削中の先生は、すでに「面白いアニキ」の表情ではなく、ライバルの目線なのである。当然

ながら先生は先生なりの解法をいくつか用意していたのだが、その生徒は全く違った道筋で東大入試の問題を解いてしまったらしい。「そこが数学の面白いところなのです」と縷田先生は言う。「数学というのは解答までの道筋が一つではありません。幾つもの道筋があって、どれを選択すれば間違うリスクを極力少なくして正解に導くことができるか。ここを見極めることができが数学の醍醐味なのです。つまり、たとえ中学1年生であっても、僕が思いつかなかつた道筋で答えを出せば素直に感心しますし、やられた！と思うことだってあります。そうした感情を素直に表現することで生徒たちは数学にのめり込み、学力も伸びていくのです」と。

結果的には半数近い生徒が問題をクリアした。残念ながら、先生が最善とする解法で解いた生徒はいなかったようだが、それでもまだまだ中学1年生。何とも驚くばかりである。



「先生できた！」と、あちらこちらで手が上がり始めると、先生は大忙しで教室を移動。

数学大好き！縷田先生大好き！

授業終了後、幾人かの生徒に話を聞いた。数学は好き？という質問に「大好き！」という答えが一斉に返ってきた。その理由は、「だって、数学ってゲームみたいだもん」という答えが圧倒的に多く、縷田先生の授業に対する工夫が伺い知れた。また、縷田先生は好き？と聞くと、これまた「大好き！」という答えが。「だって偉そうじゃないんだもん」とある子が言えば、「でも、ちょっとと声がデカすぎ」と言って笑う子もいる。総じて生徒たちは、数学も縷田先生も「大好き！」ということで一致していた。

生徒たちが去った教室で、そのことを縷田先生に告げると、「ほう、僕のことが好きとは」と言って照れた。そして「今日のクラスの生徒たちは、日本でもトップクラスの実力を身につけています。でも、中学1年生は、まだまだ子どもです。勉強に対して、自覚している部分もありますが、甘えの部分の方が勝っています。これから越えなきやならない山はたくさんあるでしょうね。それをしっかりサポートしていくのが僕たちの役目。まだまだ気が抜けません、大変です」と言って笑った。

勉強最前线

～いま、教室で～VOL.2 中3英語αクラス編

中1数学αクラスの取材を終えた1週間後、関田先生が受け持つ中学3年生の英語αクラスの授業を取材させていただいた。2年の差はあるというもののそこはまだ中学生、教室の雰囲気にも「さほど大きな違いはないはず…」と思っていたところ、それはとんでもない思い違いだった。驚いたのは、ほとんどの生徒が授業が始まる前もおしゃべりすることもなく、これから始まる授業に向けて意識を集中させていることだ。その姿は、夏期講習を取材させていただいた高校生の授業の空気感と同じで、生徒たちは、少なくともグノーブルで学ぶことにおいては、完全に“子ども”から脱皮しているようすら見えた。そしてその驚きは、授業に入りますます大きくなっていた。

(取材・文 吉村高廣)

演習開始早々、ペンを走らせる生徒たち。

「では、始めてください」などというかけ声があるわけでもなく、演習のプリントが配られるやいなや、いきなり『コツコツ』というペンを走らせる音だけが教室に響き渡る…その光景は、夏期講習の高校生の授業で見たものと同じだった。演習中に集中するのは当然のことだが、度肝を抜かれるほど驚かされたのは、ペンの音が聞こえ始めるまでの時間の早さだ。

この日、関田先生が用意した演習プリントは、英文の和訳と読解の2つ。どちらも超中学生級の難易度で問題量も半端ではない。生徒たちに与えられた時間はわずか30分。それを聞いた時は内心「とても30分では無理でしょ」と思ったほどだ。ところがそんな思いを打ち消すように、演習開始早々にペンを走らせる音が一斉に響き始めたのだ。



「それを可能にするのが、返り読みをせず英文を頭から読みこなしていく力です」と関田先生は言う。確かに、この日最初に生徒たちが手がけたプリントは有名短大入試の評論で、1つのパラグラフが長く、いちいち返り読みをしながら訳していっては論旨がつかみにくいものだった。ところが生徒たちは、先生の言う「頭から読みこなす」という力を備えているため、ネイティブと同じ感覚で英文の意味を読み取れるのだ。これはもう“グノーブル・イズム”とでも言おうか、『返り読みをしない』という英語との向き合い方が、ここで英語を学ぶ中学生にまで浸透していることに“グノーブルの英語”に対する評判の裏づけを見た。

中3英語α（最上位クラス）授業ルポ
高みを目指す中学3年生。
主体性を持つと子どもは大きく成長する。
貪欲に知識を求め、

英語科 関田 裕一
せきた ゆういち

悔しいと思った時が 力を伸ばすチャンス。

関田先生は生徒たちから『グノーブルのジェントルマン』と呼ばれており、普段は穏やかな物腰と柔軟な笑顔が素敵なお先生だ。そんな関田先生が、解説を始めた途端に豹変した。“豹変”などといういさか大げさだが、言葉遣いこそ丁寧ではあるものの、物凄いスピードで演習プリントの解説を進めるその姿に“自分のやり方”に対する強い自信と厳しさを感じられた。

授業の進め方は、全ての設問に対して生徒を指名して答えさせるというもの。解答に自信の持てない生徒はこの瞬間が一番緊張するのだという。いかにも中3英語の最上位クラスであろうとも、演習内容がセンター試験、大学受験レベルともなると、当てられた生徒の誰もがすんなり正解を答えられるというわけではない。しかしながら周りが順調に正解を答える中、自分のところでその流れを断ち切ってしまった生徒は辛いはず。後日、そのことを関田先生に尋ねると意外な答えが返ってきた。

「それでいいんです。自分が出来なかったことに、辛いとか、悔しいといった気持ちが芽生えた時こそ、さらに大きく力を伸ばすチャンスなのです。これは α クラスに限ったことではありません。自分で『悔しい』という気持ちを持ったなら、さらなる努力をするべきなのです。大事なことは、今日この問題が出来たかどうかではなく、悔しさをバネにして力を蓄える習慣を中学時代につけること。それが高校生になってからの英語や、さらにその先の大学受験に生きてくることは間違いないかもしれません」。

主体性を持つと、 底なしの知識欲が生まれる。

和訳と読解のプリントの解説に引き続き行われたのが宿題の解説だ。内容は『仮定法』を含む表現についてのものであったが、解説の途中で関田先生が言ったひと言が、このクラスの実力をよく表しているものだった。「皆さんには今必要ないことですが、もう高校生レベルの実力は十分にあるのでここで説明しておきます」というひと言だ。この言葉を聞いた生徒たちは一様に身を乗り出し先生の解説に耳を傾ける。その姿がとても印象的

だった。授業後このことを先生に告げるとさらに興味深い答えが返ってきた。

「最上位の α クラスの生徒になると、当たり前の高校生レベルの授業では退屈してしまいます。生徒たちの学ぶ欲求は底なしで、より高度なものを求めてくるのです。とはいっても、1年生の頃は誰もが皆普通の中学生でした。おしゃべりする子もいれば、授業になかなか集中できない子もいました。ですので、もちろんクラスの入れ替えもあり、 α から1つ下の $\alpha 1$ に下がる生徒もいれば、上がってくる生徒もあります。さらには意地を見せて、一度は下がったけれど復活してくる生徒もいる。そうした切磋琢磨を繰り返しているうちに勉強に対する主体性が身についてくるのです。中学時代というのは勉強への向き合い方次第で、劇的に心が成長します。そして、そのように仕向けることが、私たちの大事な役目のひとつだと思います」。



重要な部分の解説に入ると柔軟な表情が一変。優しさと厳しさを兼ね備えた授業が印象的。

研修生も思わず唸った、 演習プリントの工夫。

この日の授業には、これからグノーブルで英語を教える研修生が授業見学に来ており、授業終了後に話を聞くことができた。しきりに感心していたのは、演習プリントが実際に工夫されていることだった。

「最初にやった和訳は比較的短い評論的なものでした。かたや、読解の方は超長文の物語的な内容だったかと思います。当たり前に考えれば長文を読みこなす方がやっかいな気もしますが、実際にやってみて難しかったのは前者でした。評論的な文章には難解な単語が多く出てくるため、論旨は取れても単語を知らなければ正確に訳すことができません。一方、物語的な長文にはあまり専門的な単語が出てきませんので、読みこなす力さえ備わっていれば正しく答えることができます。ただしこれは時間との勝負になってくるので正しく読む力がなくてはお手上げです。断定することはできませんが、前者は早慶など私立の難関大学にありがちな問題で、後者はまさに東大、大問5の総合読解にあたると思います。こうした問題を1つの授業の中でバランスよくやってくれる塾は自分の経験上、まずありません。またそれをスピード感あふれる授業の中で、きっちりポイントを押さえて指導される関田先生には本当に感心しました」。

勉強最前线

～いま、教室で～VOL.3 高校古文編

まるで演劇を見ているような授業だった。もちろん、実質的な“役者”は行村先生ひとりなのだが、頻繁に生徒を当てながら“行村ワールド”に巻き込むことで、教室全体が展開の速い舞台となっている。生徒たちから『パワフルである』と言われるグノーブルの先生たちだが、その中でも行村先生の古文はひと際ボルテージが高い。とはいっても、その役回りに陶酔しているわけではない。むしろその逆だ。先生自身はきわめて冷静に、生徒たちを隅から隅まで観察しながら授業を進めている。「それは夏の授業でも間違えたよね」と、数ヶ月前の授業までさかのぼり指摘するなど、詳細な個人データを頭にインプットした上で生徒たちと向き合っているのだ。絶大な人気を誇る“行村・古文”。その人気の秘密を垣間見た。

(取材・文 吉村高廣)

5色のチョークには意味がある。

古文の授業では、毎回授業の最後に『お帰り演習』と称した全訳問題を生徒に課し、授業を締めくくることになっている。翌週、添削された解答用紙が返却され、その解説から授業はスタートする。この日も教室に入ると、既に黒板一面にその文章が記されていた。

7時15分。授業開始とともに、トップスピードで行村先生の解説が始まった。授業に参加しているのは、春先の「フレッシュヤーズ講座」から受講した生徒がほとんどで、いきなりのアクセル全開にも慣れているのだろう、少しも臆することなく解説に聞き入っている。そんな授業をしばらく見ていて面白いことに気づいた。先生は板書を行う際、白チョークに加え5色のチョークを使い分けて解説していた。そして生徒たちも先生がチョークの色を変えると急いで同じ色のペンに持ち替えるのだ。



このことを授業後に先生に聞くと「私の授業では『黒板のルール』というのがあって、赤チョークのマル囲みは助動詞、黄色チョークの囲みは大切な単語、青チョークのマル囲みは尊敬語・三角囲みは謙譲語、四角囲みは丁寧語、オレンジチョークは係り結びなどの構文、緑チョークは採点、コメントと、色分けして解説します。そうすることで、理解すべきポイントとその内容が一目瞭然となるようにしています。当然ながら生徒たちも同じ色のペンを持参して授業に参加してもらい、後々見返した時に自分の理解の確認がしやすいようにしてもらっています。何がポイントかを把握するには、ルールがあった方が便利なんですね」。なるほど、こうした授業に対するアイディアこそが、古文を正しく読解する上で大きな助けになることは間違いない。

1年間で古文の受験対応力を完成。
面白さの中に
インテリジェンスが潜む。
高校古文α授業ルポ。

国語科 行村 真治
ゆきやら しんじ

比喩を使って知識とイメージを定着させる。

読解のポイントとして先生は、『知識』と『工夫』の2点を常に強調していた。『お帰り演習』の解説に引き続いて行われた『年度末復習問題』の演習時も、「さて、そろそろ指摘して行こうかな」と言いながら生徒たちの解答を覗き込み「ああ、まだちょっと工夫が足りません」という言葉が頻繁に飛び出していた。この点について行村先生の自論はこうだ。「古文の言葉というものは、ただ単語を覚えただけでは応用がききません。つまり知識として単語の一つの意味を知っているだけでは、文章を正しく、生き生きと読みこなすことができない。それが『工夫が足りない』ということです。そして、イマジネーションを持つためには、言葉の意味をイメージしてもらうことが有効です。では、イメージを持ってもらうためにはどうしたらいいか。それは“比喩”を使って解説することが最良の方法だと私は思っています」と。



演習中も一人ひとりの進捗具合を確かめて、的確なアドバイスを常に欠かさない。

たとえば「なつかし」という単語を説明する際には、犬が「クーンクーン」と鳴きながら「なづいてくる」イメージだと、先生はゼスチャーを交えながら説明した。そんな様子を見て生徒たちは声を出して笑うわけだが、確かにこうして説明されると言葉の意味とそのシーンがイメージとして連動される。単語を覚えるということは知識であるが、それを応用して使いこなせるよう定着させるためには、やはりイメージから連想される“言葉の背景”を知ることが欠かせないとよく分かる。またその方が知識としての単語も頭に残りやすいのも事実だ。

こうしたオリジナリティあふれる授業が抜群に面白く人気の秘密でもあるわけだが、「面白いだ

けで終わっちゃダメ」と行村先生は言う。「私の比喩を笑っていたらるのは大いに結構なことです。ただ、笑い飛ばされるだけでは困ります。私が面白おかしくゼスチャーを交えながら解説する大部分は、重要な項目の時です。重要だからこそ強烈なイメージを残していただきたい。そのための比喩なのですから」。

必要なものは「問題解決能力」。

宿題として出されていた、東京大学の入試問題、さらに授業内で演習した青山学院大学の入試問題の解説は、これまでの読解以上にテンションの高いものとなった。というのも、古文はフレッシュヤーズ講座をスタートとして12月の最終授業のこの日まで、ほぼ全ての時間を『文章が読みこなせるようになること』、いわゆる読解力の完成に時間を割いてきた。ところが今回の宿題は『文章を読んで、後の問い合わせよ』の「後の問い合わせよ」の部分、すなわち「解答力」がテーマであり、今まで授業でやってきた範囲から、さらに踏み込んだ内容だったからだ。

行村先生は「実はここが一番肝心なのだ」という。もちろん正しい読解ができなければ、そこから先など論外だ。だからこそ、まずは読解力を身につけることが大事なのである。しかしそれだけでは確実にマルを貰うことはできない。受験を前提とした授業をする以上、正しく把握できている前提のもと、設問文からどういう答案が求められるかを見抜き、それに答える力をつけることが肝心なのである。実は、この力を本格的に養うのは1月に入ってからの授業で行われることになるわけだが、それに先立ち、行村先生は生徒たちに興味深い話をした。

「皆さんは古文自体の専門家にはきっとならないでしょう。それでいいのです。重要なのは、古文という題材を通して養う『問題解決能力』です。古文というものは日本人の情緒に触れる由緒正しきもの、などという理想は確かに大切だとしても、与えられた題材についてポイントがどこかを正しく見極め、さらに相手の求める答えを導き出すこと、これが何より重要です。これは当然、受験科目である古文にとどまるものではなく、皆さんが大学に行って専門分野の研究をするととも、さらにその先でも必ず必要になってきます。その力を養うためにも、『古文』をしっかりやりましょう」。

おしゃべり!先輩

緒方 優くん (東大理Ⅲ 1年 開成出身)

東大を目指すなら、
主体性を持って勉強に向かうことが大事。
それを教えてくれたグノーブル。

義務感で勉強していても身にならない。

漠然と「東大に行きたい」と思い始めたのは中学1年の時です。学校が開成だったので、それも自然な成り行きだったんです。理Ⅲを意識したのは高1の時に行ったオープンキャンパスがきっかけです。

ちょうどその頃僕は、グノーブルでとても大きな気づきを得ました。それは『自ら学ぶ』ことの大切さです。それまでも、もちろん自宅学習はしていましたが、どこか「勉強しなきゃならない」という気持ちが強かったんですね。その理由は、正しい自宅学習のやり方を知らなかったからです。グノーブルは授業ももちろん素晴らしいのですが『必ず復習する』ことを強く推奨していて、自宅での勉強方法まで指導してくれるんです。「授業」→「自宅での復習」のサイクルがうまくいくと授業がとっても楽しみになる、ということに気づけないと義務感とする勉強から脱皮できません。そこに気づいたことは受験勉強をする上でも大きな意味があったし、今の僕自身が大学で学ぶ姿勢の背骨にもなっています。

グノーブルは英語だけじゃない。

英語の中山先生については、開成の中でもよく名前が出ていますし『グノーブル=英語』というイメージは完全に浸透していますね。ただ、他の教科については、僕が高校の頃はまだ英語ほどメジャーじゃありませんでした。

でも、古文の行村先生の授業などは信じられないくらい楽しくて確実に力がつきましたし、直前講習でとった『東大理系数学』という講座などは、大手の予備校などではとてもお目にかかれないような質の高さと面白さを兼ね備えた問題に出会うことができました。どちらも実際に受講してみて「良かったな」と思えるものでした。



でも、古文にしても数学にしても、それを楽しむためには自分が主体的に勉強に向かうことが前提となります。どの教科の先生も皆「勉強したい」と思わせてくれるような先生だったように思います。やはり、高1、高2の時点で勉強の面白さを知り、自ら学ぶ習慣が身についていないと、高3になって急にダッシュしても息切れしてしまうと思います。

量も大事。質の高い勉強はもっと大切。

僕はひと頃、寝ている時以外はずっと勉強して、スケジュールもぎっしり組んで寸分の狂いもなくという感じで勉強していましたが、問題数をいくらこなしたところで東大の問題はできるようにならないと実感したことがあります。

もちろん量をこなすことも絶対に大事ですが、量を重視するよりも、質を重視した勉強することが大事だと思います。また、自分が何のために勉強しているのかを考えることも必要でしょう。特に理Ⅲを目指す人は、できるだけ早いうちにそのあたりのことをしっかり考えることが大事です。なぜ東大なのか。なぜ理Ⅲなのか。そして何のための勉強なのかを考えて、定めた目標に邁進してください。

(取材・文:吉村高廣)

詳しいインタビュー内容は『Gno Tube』でご覧いただけます。
www.gnoble.com/gtube

カラダとココロのSOS

第3回

寒い季節の大敵！風邪対策にも活用したいアロマのあれこれ

風邪対策に最も有効なのは、外出から戻ったら、よく手を洗うこととうがいをすることです。もちろん人が多く集まる電車に乗る時などは必ずマスクをして、ウイルスを体内に入れないことも欠かせません。アロマオイルの成分を上手に使えば、より効果的な『予防効果』と、風邪をひいてしまった時の『対処効果』が期待できます。今回は、受験生にとって『寒い季節の大敵』である風邪対策についてご紹介します。

※

アロマオイルの中には殺菌作用や抗菌作用が期待できるものや、痰を切ったり咳を沈める作用が期待できるものがあります。風邪対策におすすめできるアロマオイルは、ユーカリ、ラベンダー、ローズマリー、ペパーミントといったベーシックなものから、ティートゥリー、スイートマージョラム、ブラックペッパーなどの比較的香りの個性が際立つものまでありますが、今回はベーシックなものを使用した『うがいレシピ』と『蒸気浴レシピ』をご紹介します。

アロマには“風邪を治す”効果はありません。

アロマオイルの成分には、確かに殺菌作用や抗菌作用に有効とされる成分が含まれています。しかしながら、風邪を治癒する効果はありません。ここに紹介した『風邪対策』とは、私たちが日常生活の中で当たり前にやるべき予防や対処に“リラックス効果”という付加価値をつけて行おうというものです。本格的に風邪をひいてしまったら、こじらせる前に一刻も早く医師の診断を受けることをおすすめします。

英国 I F A 認定アロマセラピスト 田中 薫



この
一冊

『14歳からのお金の話』

突然子どもから「新自由主義ってどんなものなの？」と聞かれたら、皆さんはどう答えるでしょう？「それはね、市場原理主義に基づいて、『小さな政府』を推進しようということなんだよ。合理的経済人を正当化した資本主義体制のことだよ」とでも説明しますか？これでは子どもは「なんのこっちゃ？」と混乱するばかりです。この問い合わせに対して池上氏はこの本の中でこう答えています。「資本主義経済の国にも反省が広がり、なんでも自由にするのではなく、必要なことには国が口を出すようになってきました。（中略）ところが、その結果、経済が十分に発展しなくなったと考えた政治家や経済学者が、『もっと規制をなくし、経済活動を自由に行えるようにすべきだ』と主張するようになりました。こうした考え方を新自由主義と呼びます」と。頭で理解していても、それを子どもが分かるように説明できなくては「本当の理解でない」という池上氏のスタンスで書かれた、子どもと大人の『お金と経済を知る』教科書です。



池上彰 著
マガジンハウス
(1200円／税別)

編集後記

中学受験は『親の受験』と言う人もいるくらい勉強に対する親御さんが関わるウェイトは大きなものがあります。しかしながら、大学受験についても親の関わり方がとても大事であるということを、今回の巻頭特集の取材を通して改めて実感しました。いくら大人びた態度でいても、中学生・高校生はやっぱりまだまだ子ども。なかなか正しい判断はできないものです。とくに塾選びについては子ども任せにせず、ひとまず親の目を通して決めることが成功につながる決め手となるのだと。子どもを持つ一人の親として、説得力のあるお話をでした。

◆今回の表紙は、ナポレオンです。英文に書かれた内容は『優れた能力も、機会をなくしては取るに足らない』というものです。

(編集責任：吉村高廣)



2011年 グノーブル “春の講座” 説明会のご案内

グノーブルで
好スタート!
トップランナーで
東大へ。

新中1生のための スタートダッシュ StartDash講座

新中1生
スタートダッシュ講座
説明会
参加無料(予約不要)

中学受験生限定
2/7(月) 10:30~ 新宿本館 **2/12(土) 10:30~ 渋谷本館** **2/19(土) 10:30~ 新宿本館** **2/27(日) 10:30~ 新宿本館**

講座日程 (英語・数学／各2時間×4日間)

Fターム (英・数)

数学 : **2/15(火)、22(火)、3/1(火)、8(火)**
英語 : **2/17(木)、24(木)、3/3(木)、10(木)**
17:30~19:30

Sターム (英・数)

3/5(土)、6(日)、12(土)、13(日)
13:00~15:00、または15:30~17:30
※1科目受講の場合、時間帯を選択できます。

Aターム (英・数)

3/15(火)~18(金)
17:00~19:00、または19:15~21:15
※1科目受講の場合、時間帯を選択できます。

※授業内容など詳細は新宿本館・渋谷本館までお問い合わせください。(HPでもご確認いただけます。)

最終日に4日間で学んだことの「確認テスト」を行います。
答案は添削の上、全員にコメントをつけ郵送で返却します。
※この「確認テスト」は、通常授業の入室テストを兼ねています。

“この授業ならいける!”
グノーブルで
確信を持とう！

新高1生のための フレッシュヤーズ Freshers'講座

新高1生
フレッシュヤーズ講座
説明会
参加無料(予約不要)

2/19(土) 10:30~ 新宿本館 **2/27(日) 10:30~ 新宿本館** **3/5(土) 10:30~ 新宿本館** **3/6(日) 10:30~ 新宿本館** **3/13(日) 10:30~ 新宿本館**

講座日程 (英語・数学・古文・EGGS(英文法基礎講座) /各2時間×4日間)

受講料 : 1科目

20,160円(税込)

※開講時間・授業内容など詳細は新宿本館・渋谷本館まで
お問い合わせください。(HPでもご確認いただけます。)

Aターム

3/15(火)~18(金)

Bターム

3/20(日)~23(水)

Cターム

3/25(金)~28(月)

Dターム

3/30(水)~4/2(土)

2011年 説明会・入室テスト 新宿本館

説明会 : 予約不要
春の講座、4月からの通常授業を希望される皆さま対象の説明会です。

通常授業を希望される場合、入室テストを受験してください。受講料:無料・予約不要

説明会 **2/19(土) 10:30~** **2/27(日) 10:30~** **3/5(土) 10:30~** **3/6(日) 10:30~** **3/13(日) 10:30~**

入室テスト **2/27(日) 11:30~** **3/5(土) 11:30~** **3/6(日) 11:30~** **3/13(日) 11:30~**

(新中生～新高生)



GNOBLEをYouTubeで体験できます

どんな先生がいるんだろう？ どんな授業をするんだろう？

グノーブルは何が違うんだろう？

グノーブル流“学びのポイント” 続々YouTubeにアップ中！

www.gnoble.com/gtube/

※新中1生の通常授業への入室にはスタートダッシュ講座をご受講ください。(スタートダッシュ講座開講期間には、新中1生対象の入室テストは行いません。)

2010年 大学受験合格実績 第4期 在籍307名

東京大学各科類

東京大
54名

国公立慶医
48名

早慶上智
328名

私立大 医
69名

一橋大 15名
東工大 9名
東外語大 7名
私立大 30名
慶應大(英) 8名
東京理大(英) 6名
北里大(英) 5名

東京医科歯科大(医) 5名
東北大(医) 1名
千葉大(医) 2名
筑波大(医) 5名
群馬大(医) 3名
鹿児大(医) 6名
東京慈恵医大(医) 13名
日本医大(医) 9名
順天堂大(医) 8名
東京医科大(医) 4名
早稲田大 133名
慶應大 149名
上智大 46名
東京理科大 30名

新宿本館・受付

〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

お問い合わせ

03-5371-5487

交通 : JR新宿サザンテラス口徒歩1分

JR代々木北口徒歩5分

受付時間 : 月～金曜日15:30～21:00

土曜日14:00～21:00

日曜日 休み



渋谷本館・受付

〒150-0043 渋谷区宇多山1-9-4 ODAビルディング2F

お問い合わせ

03-5459-7805

交通 : JR渋谷西口 徒歩2分

受付時間 : 月～金曜日15:30～21:00

土曜日14:00～21:00

日曜日 休み



[2011年度 開講科目] (中1・2・3) 英・数 (高1) 英・数・古 (高2) 英・数・現・古 (高3) 英・数・国・小論

知の力を活かせる人に
.. 東大・医学部・早慶 難関大学の受験指導

GNOBLE

グノーブルにアクセス。東大にアクセス。

www.gnoble.co.jp